

ツルが選んだまち ～出水市の取組～

鹿児島県出水市 市長
渋谷俊彦氏

ご紹介いただきました鹿児島県出水市長の渋谷俊彦です。本日はこのような機会をいただきまして、大変光栄に存じます。トップバッターとして、「ツルが選んだまち ～出水市の取組～」について発表させていただきます。

先ほど、順天市のスケールの大きな取組のお話をうかがいました。出水市も順天市とは3年前からナベヅルを縁として姉妹都市盟約を締結させていただきました。先ほどの国際庭園博覧会の室内の方に、出水市の武家庭園も展示させていただきました。いろいろとご指導をいただいているところです。

出水市は、鹿児島県北西部の八代海に面しています(図-1)。面積約330平方km、人口約5万5千人のまちで、2006年(平成18年)3月13日、旧出

水市、旧高尾野町、旧野田町の1市2町が合併して、現在の出水市が誕生しました。来年3月には市政施行10周年を迎えることになります。

新制出水市の将来の都市像として、「人と自然が融和した にぎわいある元気都市 出水市」を掲げています。2011年3月11日に、九州新幹線が福岡博多まで全線開通し、博多まで3時間20分かかっていたのが1時間10分に短縮されました。南九州西回り自動車道等の高速交通網の整備も進んでいるところです。企業誘致および本市の特性を生かした産業や観光の振興による定住人口や交流人口増大等の地域の活性化を図りながら、市民参画と協働による安全・安心で、たくましく躍進する北薩の中核都市の創造を目指して、市政を進めています。



図-1



図-2

本市は、温暖な気候、広大で肥沃な平野、豊かな水と緑、海・山の自然環境に恵まれていて、毎年1万羽を超えるツルが飛来する世界的な越冬地として知られています(図-2)。「鹿児島県のツルおよびその渡来地」として、国の特別天然記念物に指定されています。ちなみに、今シーズンのナベヅル、マナヅル飛来数は、先日11月7日に実施しました地元の中学生による第1回ツル羽数調査で、14,086羽を記録しております。

また、出水市には上場遺跡など、先史時代から人々が生活していた多くの遺跡をはじめ、薩摩藩主島津氏発祥の地として、初代忠久公から5代貞久公の墓碑のある五廟社等の史跡があります。また、江戸時代、肥後藩との境になっていたため、要衝の地として薩摩藩最大の外城が置かれ、現在国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている出水麓武家屋敷群など、往時の面影が今も残る「ツルと歴史のまち」として、観光振興に力を入れています(図-3)。

さて、先ほど、特別講演をされました韓国・順天市さんとは、ツル保護を縁として、2012年(平成24年)11月に姉妹都市盟約を締結しました(図-4)。本市の大産業祭において順天市の特産品販売や、グローバルな視野を持った人材育成を目的に、両市の中高校生を派遣しあう青少年友好交流等

を行っています。昨年11月には、出水市に趙忠勳市長をお招きして、ツル博物館クレインパークにて記念のセレモニーを実施し、さらなる交流の拡充について確認しあったところです。また、今日ご出席の山口県周南市さんとはナベヅルを縁として、さらにタンチョウの北海道釧路市さんとそれぞれ友好都市を結んでおりまして、各種イベント等で特産品を販売したり、中学生を派遣するなど交流を深めています。

それでは、はじめにツルの渡来・保護状況について紹介いたします。まず、出水市におけるツルの渡来数です(図-5)。戦争直後の1947年度(昭和22年)には、275羽という記録が残されていて、戦後の一時期は250羽から300羽という時代もありま



図-4



図-3



図-5

した。その後、国から1952年(昭和27年)に特別天然記念物に指定され、地域の皆様や行政による保護活動が本格的に始まりました。そのこともありまして、1975年(昭和50年)頃から徐々に羽数が増えてきたところでした。1992年度(平成4年度)に、初めて1万羽を記録しました。1997年度(平成9年度)からは、19シーズン連続して万羽ヅルを達成しています。

世界中には15種のヅルがいるといわれています。そのうち、出水平野では7種のヅルを記録しています。最も数が多いのはナベヅルで、毎年約1万羽以上、次いでマナヅルで約3千羽渡来しています(図-6)。そのほか少数ですが、クロヅル、カナダヅル、アネハヅル、ソデグロヅル、タンチョウが渡来することがあります。

皆さんから、よく「なぜ、出水にあれだけのヅルが来るのか?」という質問を受けます。会場にお越しの皆さんのなかにも、不思議に思っている方があろうかと思えます。私自身、その理由について考えてみました。まずは気象条件がヅルの生息条件と合致しているのではないかと考えています。温度、湿度、雨量、風向きなどの自然条件が、出水平野の地形的なものも含めて合致していると考えています。同時に、国や県のお力添えにより保護区を設けていただいています。そして、安全なねぐ

らも地権者のご理解で確保されています。このほか稲刈りの後の二番穂などの餌も豊富にあること、そして何よりも地域住民の方々の世代を越えたツルとの共存・共生が図られてきたことなどが、ツルの増羽につながったものと考えています(図-7)。

昭和47年頃から農地の借り上げが始まりました、はじめの頃は5haほどでしたが、現在では、保護区の面積は104haとなっていて、180人ほどの地権者に農地の提供をご協力いただいています。また、借上料も地権者のご理解のもとに、何年も据置きしていただいています、大変ありがたく思っています。こうしたことでツルの安全が確保されると同時に、餌も確保されて増羽につながっているのではないかと考えています。



図-7



図-6



図-8

それでは、ツルを活用した取組についてご紹介します。まず、「ツルと歴史のまち」として知られている出水市には、マスコットキャラクターとして「つるのしん」がごぞいます(図-8)。20年ほど前に誕生しています。今年の成人式には「つるのしん」も参加し、めでたく成人を迎えました。これは、侍の姿をしているツルのマスコットで、いろいろなイベント等に参加するとともにフェイスブックからも情報発信を行っています。また、ツルに関連した事業としては、出水の特産品とまごころを「ツルの恩返し」としてお送りする「ツルの恩返し便」事業を行っています(図-9)。みかん、和菓子、鳥の製品、焼酎など、皆さんが真心込めて作ったものです。お申し込みいただきますと、届け先だけでなく送り主にも「ツルの里会員証」がもらえ、ツル観察センターやクレインパークいずみの無料入館やホテル、旅館および飲食店のサービスなどの特典があります。

さらに、ツルを縁としていろいろなイベントを開催しております。まずは、「第28回出水ツルマラソン大会」です(図-10)。現在では、10月の第3日曜日に開催しています。かつては2月に行っていましたが、2012年(平成24年)度からは鳥インフルエンザの影響の少ない10月に開くようになりました。年々参加者も増えていまして、昨年度は過去最

高の3,155人、今年も3,105人の参加をいただいています。地元の特産品でおもてなしを行う前夜祭も開催し、参加者の皆さんと交流を深めています。マラソン大会には全国各地からランナーが参加され、とりわけ今年は台湾から10人の方が参加しました。このため、宿泊者も多く、市内のホテル等では対応できず、近隣市町にも宿泊してもらうほどでございます。コースは3つ、フルマラソン、10km、3kmになっています。

ツルを見ながらウォーキングをしてみようということで、毎年12月に「ツルのまちウォーキング大会」も実施しています(図-11)。コースは約13kmで250人から300人ほどの方々にご参加いただいています。これは、高尾野の河川敷を利用した周回コ



図-10



図-9



図-11

ースで行われます「たかおの鶴駅伝大会」です。中学生、高校生などがそれぞれ競争しています。

このように、ツルを銘打っているいろいろなイベントを計画し、地域の活性化に努めています。写真は、今年3月の第51回目の「ツルを送る夕べ」の開会式の模様です(図-12)。ツルは、2月から3月にかけてそれぞれ繁殖地に帰っていきます。その道中が無事でありますようにと祈りを込めて、職場・団体対抗によります「ツルを送る夕べ」という歌謡大会を開いていまして、大変にぎやかに開催されています。

次は「ツル米」検討会です(図-13)。以前は、ツルの渡来地である荒崎地域で生産される米を「ツル米」として、ツル観察センターの売店等で販売

していましたが、現在は行っていないようです。しかし、本年度、東干拓において「なつほのか」という新品種の米の栽培がされています。食味もよく収量も良いとの評判です。ツルの渡来地で作られた縁起の良い米として今後、農家の方々と協力を行い出水の特産品として活用できないか検討を続けていて、来年からは、販売も計画されているようです。

また、郷土のシンボルであるツルについて詳しく知ってもらい、郷土を育てるとともに地域・社会に貢献できる人材の育成を目指して、2010年(平成22年)度から、「いずみツルガイド博士」検定試験を実施しています。市内の小・中学生を対象に、ツルの生態や保護活動などに関する知識を問う筆記試験およびその魅力を発信する力を試す実技試験を実施し、ツルガイド博士として認定します。過去5年間の受験者数は、5,546人に上り、現在62人のツルガイド博士が誕生しています。博士たちはボランティアガイドとして、ツルの魅力・出水のすばらしさを観光客などに伝える活動を行っています(図-14)。これが広く行き渡りますと、子どもたちがツルに対する理解が深まり、あるいはツルとの共存・共生していく意識がさらに高まっていくのではないかと考えているところでございます。観光客にもツルガイドの話は、大変好評です。



図-12



図-13



図-14

ツルとは直接関係はありませんが、今年初めての事業として、竹灯籠でつなぐ光の祭典「いずみマチ・テラス」を国民文化祭の一環として、10月30日から11月1日まで3日間実施いたしました。出水市の人口と同じ55,000本の竹灯籠を地元の青年たちが作製し、その光でまちを照らし、情緒あふれるまちづくりを行うことにより、交流人口の増大を図り、まちの活性化につなげようという趣旨です(図-15)。

今後につきましても、このような事業を継続し、「歩いて」、「見て」、「体験できる」観光の確立を行ってまいりたいと考えています。最後に、毎年1万羽以上のツルが選んだまちとして、ツルとの共存・共生を図りながら、ツルを活用した地方創生について、より一層取り組んでまいりたいとの決意を申し上げまして、出水市の取組の紹介を終わらせていただきます。

ご清聴、誠にありがとうございました。



図-15